



H-KANOMATA

安曇野の「秘境」

中嶋嶺雄

(東京外国語大学教授・現代中国学)

最近安曇野がブームである。信州・松本に生まれ育ち、いまでも多忙な日日の間隙をぬって、北アルプスを年に三〜四回は登っている私にとって、また、長女には「しなの」(科野)、次女には「あずみ」(垂純)と命名している私であつてみれば、安曇野が多くの人に愛されることは嬉しいことである。

しかし、安曇野と言えば、大方、バスかサイクリングで穂高のわさび畑や礫山美術館などを忙しくまわるか、白馬村のペンションや別荘で一兩日を過ごして「塩の道」を探訪といったパターンでありすぎることが、残念でもあり、可笑しくもある。たしかに、それらの場所も安曇野には違いないが、もっと素朴で美しく、いかにも安曇野らしい魅惑的な「秘

境」があちこちにあるのだ。

いま、ここにそれらの場所を記すと、たちまち観光化しかねないので躊躇するのだが、たとえば豊科町から西へ入った安曇野の中心、堀金村の北アルプスの山裾で、もう常念岳も近すぎて見えない鳥川地籍の岩原には、安曇野の大庄屋・山口家の古い屋敷が江戸時代初期の壮麗な書院風の庭園とともに残っていて、邸外には走り水が激流し、廃寺となった安楽寺の名残りをとどめる近くの赤松の大木や供養塔とともに、昔ながらの安曇野がそのまま今日でも息づいている。山口家は、日本アルプスの命名者ウェストンが、常念岳に登った明治二十六年に泊まった家でもあり、当時の鳥川村村長・山口吉人氏が遠来のイギリス人を歓待したのだという。鳥川村は隣の三田村と一緒にあって、現在は堀金村となっているが、村長でもあった山口誠象氏の大人ぶりを子供心に私も記憶している。その長男が夭折した信州日本画壇の鬼才・山口蒼輪画伯で、私の亡父の若い友人でもあった。わが家には蒼輪氏の絵が何点か残っている。

私は、この連休にも、山口家の近くを散策し、そのあまりの静けさと自然のコンポジションの妙に打たれ、久しぶりに安曇野の田園風景を満喫したのだが、もとより、そこに観光客は一人も来ていなかった。